

志野香道傳書

特別
14
696
244



玉如
景文
序

曾
699

曾
699

曾
699

曾
道
轉
運
轉

244

696
244

夫和を天下に達道あり

天和を雨露時を夫



地和を乾時ハ 万物生

成夫ハ人知を別と下

平之と謂り今也香居法

式は礼を以て外状正し敬をも

く内を守り義を中不

居しを礼を以て友と

古代の聖王武門の良法

是をあきて人事の和を

也と里以て邦思以て避る

と交ハ礼のつゝ君と

て信々也子朋友の信有

事長知の序成る也



乳徳と一本の香爰に
何れも香爰を天地自然
乃私なり成りて地舎盟
此のの理と鼻端の
何れも是と成りて他
求じや嘗て少堂上
の香爰ハ一度 京極家
にわちて焼くひ堂上
也して地下よくも古今
うやし 先生一元
逍遙院殿の門下は詳して
香の醜り茶の憂く
香ハ百代乃亀澁とす
あるよのを記にす

香道をととと 美園と
その有といへとも 先生の
一云なり此の二云成出
事ありたるは實に香
枝の源ハ先生有り子
息成也といとも 先生乃
傳を祖とて後朝平
学ひたり習く 漸
九牛の一毛を得たり 嗚
你ふりたりや 香枝の
妙鳴呼神なり 妙
先生の教

于時享保庚戌陽月既望
昂今詠
宗吟

一 條目若一条のうらふ審の事の多し
 とりし母古書毎のより何て正
 中に志の以考故平古也凡例
 の依り書写とむ疑惑乃辨
 口授とりて解魚し余考
 要の事ハ増補して志里共
 便す

凡例

- 一 初ハ香席の法度^英名目を集て少
 く人の心得以て初心をとらひく
- 一 次ハ火元の設帳を集くも継の事成
 内よこせそ^英を正し^英継の迷
 さまの事成^英連る也
- 一 次ハうり川の金銀の事と集
 席中のふれれ^英事と^英
- 一 次ハ香具の製法の事と集て
 ぞろぞろ^英向惑せざる^英設し^英
- 一 次ハ右宴の事と書記^英他の
 席少て^英置^英あり^英の事
- 一 次ハ可法^英折形^英と集て^英
 のよ^英記と^英記し^英の^英法

の末れ世に乱れ^英事成^英い^英
 次ハ飾方の事と^英して^英沙^英の^英
 英^英格^英と^英の^英座^英置^英方^英と^英記^英
 次ハ極秘^英の^英事^英成^英が^英
 善^英の^英御^英事^英ハ^英大^英小^英と^英る^英
 ふ^英の^英香^英道^英の^英秘^英事^英とも^英成
 け^英一^英系^英ふ^英と^英置^英し^英也

明應八^英永^英年^英九月 志野宗信 判

客意上

- 一 香席^英實^英名^英の^英事
- 一 法度^英の^英事
- 一 名目^英の^英事
- 一 親つ^英ふ^英の^英事
- 一 后^英の^英事
- 一 香^英の^英事
- 一 席^英の^英事
- 一 小^英の^英事
- 一 名^英の^英事
- 一 右^英の^英事
- 一 鼻^英の^英事

注意

- 敷紙の事
- 香割大さの事
- 灰のうしろの事
- 灰の後の事
- 灰たりの事
- 組合の事
- 銀葉の事
- 認りの事
- 盤と立おの事
- 火加減の事
- 香代保の事
- 香合の事
- 香新の事
- 香より香物との事
- 同じく灰の事
- 香居の事
- お供の事
- 形より用やの事
- 盆器の事
- 石物香所の事

- 約香燻の事
- 鴨の香所の事
- 角香燻の事
- 草首の事
- 着板の事
- 香え盤打の事
- 製法
- 炭燻製法の事
- 炭製法の事
- 灰製法の事
- 袋製法の事
- 灰及板の事
- 右實 五二
- 香席 足元の事
- 上座の事
- 組香の事
- 組香の初式の方
- 十組香の事
- 香人 名前をの事
- 香燻の事
- 焚組香の事
- 継ぎの事

香紙の事
根葉打敷の事
右香持の不用て香焚やりの事
山後の香の事
新巻の事
香とく事
大筋の事
花舎の香の事
盆まで香とす事
酒裏席香の事
薫物敷新巻香の事
薫物の法ある事
敷紙寸法事
紙添寸法の事
小紙添寸法の事
ろ紙書寸法の事
屏巻寸法の事
細分紙寸法の事
根葉打敷寸法の事
香紙寸法の事
大筋寸法の事

香屏風寸法事
大折巻寸法事
湯紙寸法事
帯の寸法事
押板寸法事
香紙寸法事
色紙寸法事
帯元巻打敷寸法事
巻立お寸法事
志紙紙寸法事
縁香紙寸法事
鏡方寸法事
香紙綴紙の事
高紙紙かすりやりの事
伏香紙綴紙の事
床巻の事
金巻の事
茶室金巻の事
押板綴紙の事
玉巻の事
くへん巻の事

新要

袋類細綴り事
 大折袋事
 福り喜とさる事
 香表やりの事
 名出香事
 本況事
 葉奈袋事
 花月香事
 後陽の香法事
 沉弁の事
 追加事
 香と送事
 香所とゆ事
 極意 一ニ
 伏香事
 煮の製法事
 煮の成り事
 連弁師法席の事
 席との事
 香孔系湯の事
 名香合式増の事

問答式抄事
 名号事
 賛合香事
 連理香事
 石ニ系列傳事

右先師筆記の系目也初心
 成らざる由免事
 有して書字とゆ事
 しの也

宝曆十二年
 十月

白きーく
白 浅く
りり萩のまぬ
き ねる
秋

からのみぬ
すき
又 秋のまぬ
すき
又 萩のまぬ
すき

つぎく
すき
又 萩のまぬ
すき

あさぐさ
すき
又 萩のまぬ
すき

つぎく
すき
又 萩のまぬ
すき

はばみぬ
すき
又 萩のまぬ
すき

くれあい菊
すき
又 萩のまぬ
すき

う川うい菊
すき
又 萩のまぬ
すき

又
すき
又 萩のまぬ
すき

りみら
すき
又 萩のまぬ
すき

又
すき
又 萩のまぬ
すき

又
すき
又 萩のまぬ
すき

又
すき
又 萩のまぬ
すき

又
すき
又 萩のまぬ
すき

又
すき
又 萩のまぬ
すき

白 浅く
ねる
むすき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

すき
すき
すき

謹供神明則感通於彼來格于
此燈影照無寐心清聞妙香杜
少陵也一炷烟中得意九衢塵
裏偷閑黃魯直也嗚呼香之為
德宇內更有何物而代之可貴
之甚也是以有香銀香箋香
香方洞天香巖且味林香七要等
書則其所致至賞可拜想矣於本
邦香合之盛行朱萑帝之神童
自美平初孔嗜薰香右大辨滋
野井公忠朝臣延喜天慶間檀
開香之名故命而令幹薰香盡
斯迺大藏御國糺之子而光孝
帝之皇孫也當視源氏物語六
糸京極傳卜四町居準擬四時

立香石誠優劣之宴集堪想像
焉且以黑方侍從等監製衣考之
這箇二方者其先仁明天皇所
深秘則薰香之原始可知良久矣
柳也諺稱伽羅者梵語而中
華所謂奇南奇藍等是也然木子
東璧於綱目則沉香為奇南其
品類殆夥宣辨用悉至十種香
者後醍醐建武比勾當內侍系
圖香真筆聽方今現在余憶
奚昉乎婦人手其自出猶嚮是
著矣敢要識者考證爾後慈照院
義政相公時有執事志野宗信者
性質得香道骨髓因相公亦為
師範始出宇治山香名題焉

共角之倚之品彙建遂格式亦
全備中建後水尾院御宇
益從興起已降頻々相傳而
上下貴重者乎蓋歛此市井未
川常由者專達斯道而鳴于世間
師亦展轉張本於此深受蘊奧
其名藉甚則於茲編輯諒可謂
千秋龜鑑矣師素城陽產而名
忍鐘號惠南及父前田久友之男
也其先累世承願寺家臣當時難兄
國任仕而襲其職師唯天資隱逸
自幼嗜學十又九歲甫入天台律門
今既半白踰一彌清規嚴密也矧
亦書法畫圖詠歌聞香悉得其
或者雖戒足之餘事胸堂洒落

操守否否所食之所得熟可見矣
誰不嘉尚哉然於余序識淺見
隘而奈已免何乎達人之誦何
謾摠其厓畧以塞懇請而已

淳保庚子首夏上絃老逸長南茶齋丹堂
弄毫於洛下第五橋東蝴蝶寢

連理香之事

一十百瘡小いたるやまの連理と
 のさすとい先達れ旋よりては
 道れ秘花よりれ傳授也故に
 け一番の事皆かたけ次記録
 と又残す或戒しむ古来
 也今もそ授と忘れ制し
 是とちや管成はしりきてみ
 に記す次も進けはの境に
 入志と付くれ海あり敢て
 惜むに何寸經の獲鱗クハク也
 何れもこれ事ありよそ収

世小渡合十燈と連理香より傳授

連理
 鱗

香次書

- | | |
|----------|----------|
| 一ちりけんの時ハ | 一うらみの時ハ |
| 十 | 一 |
| 一とらふこの時ハ | 一紫の思ふ時ハ |
| 三 | 一 |
| 一人小達成の時ハ | 一ちやゆの時ハ |
| 二 | 二 |
| 一ちやあひの時ハ | 一うれはの時ハ |
| キ | 一 |
| 一人と清縁の時ハ | 一人と清縁の時ハ |
| 丁 | エ |

一 灰の事

一 春ハ一 一 秋ハ キ

一 夏ハ二 一 冬ハ 井

名香合の事

一 名香合儀一番分十番近二瓶ノ世殿
ト通人教十人たり 殆ど是ノ事
二 瓶元香とて出テ香よ子奉大守
水取除テ外十瓶ノ内奉殿内トテ出
むすひ二瓶也 香の内ニ先たくと
た定後にたくと定定たの香よき
出た時たのれとて折た香たも有り
海さうテ香も有たのれと折たの調換

枚少し長
厚く分せ

表ニ名々名茶出裏に花と香又存一枚
ト書い包紙ニ唐中一枚ハツ切く
とと回く右紙にたらくけて香乃
存と上書テ中ニ香と名茶と書
写にたらくみあけてい程きやみの紙に
二とく日紙の中ニ香とつみんおん
人の十種香とて名茶の紙の色この如く
何れ居てもその紙は名茶の紙の
臨ふと立念の紙列首香合と云事
不及す 三条殿の紙はたきわ合と云事
山奥の紙は緑と取て奥の紙は中
の紙は白と云に 辨友と云ふ紙は
直名と紙奥の紙は白と云ふ紙は
心持指南奥の紙は白と云ふ紙は
三条殿の紙は白と云ふ紙は
失念

有年之口傳之事自若年之何
致十年之系殿下 依波熟中
仰步級為子孫始重以之秘
者一可道別人 吾儒下 族智之有
乃安以之及之唐如同字方以下
能何你由傳珠光 松中 拙者古鬼
山中 汝字正之 夫尚時 之 吾知之者
故之 吾之 由也 初者 一後 八 別人
汝何知 擅有 度 此 且 古 以 中 誠 二 何
當 玄 古 个 難 有 子 細 以 汝 誠 于
何 始 以 一 冊 不 二 之 介 尼 公 自 然
志 深 挽 何 仁 八 于 竟 終 尼 他
系 終 回 披 之 有 相 傳 之 每 字
一 一 傳 古 之 葉 一 神 音 心 不

二有他見之江 亦不 初有之 聖
之 向 二 調 會 者 之

文應元年九月 宗信

存一札字之 公事 列之 吾 山 采 之 邊
身 一 高 教 志 之 義 一 一 之 度 思 令
乃 同 字 之 汝 何 字 故 吾 以 汝 氏 之
岸 中 卒 余 之 系 之 義 八 他 之 之 之
以 書 而 之 之 之 為 建 或 之 之

永祿元年 日省

毎香採用用

一 香少山の香炉に与る有る香の香通し
以後三々其の香を焚く人灰押入れの香心
は不潔にして可成り事

一 香通しの席順にて二層を何れも其の香の
香別廟に法に事用捨つるべき事然とも
時分よき事世に付は侍

一 香此物も前より鼻とく異しく風情を改はく
ろいれり有る事

一 香席(物)は筆の類持事事
一 扇(人)香の海に其の自余乃心一

一 人と其れおのり
一 香炉(五)座一
一 札筒(折)札を取久し

一 香才不用事
右者先作の説(其)亦酒煙草白紙の法
花式の香席料理扱、白紙有物尾

一 名目
香棚 札箱 十種香筥 根葉 香箱
香炉 火盆 札 札箱 札箱
香袋 根葉盤 香心脚立 香派 香著
火著 大箸 灰押 初公帯 先串

一 香心
香元盤 立物類 立物立 文庫盤 香板
加履(心) 香単笥 香小包 炭盆 火味
根葉入 香力 香別盤 香屏風 香香大小
火(取)香炉 香盆 立物類 香袋 蒸物箱
沉香 右之類 宗信時代より後日増

一 好
おを述べた
宗拾代の

一 網はひの事

香と人々
香の心
香の心
香の心

火著を火の
香を焼く
香を焼く

立札筒根葉入
十種と二ツと云
式と云

一 二ツと云
一 二ツと云

香炉の人と連中といふ札と云ふ香一巻ん
淵いゝをゆつゝと云ふ信暗々香元を火印と
ゆふ唱あまや人は今香元といふゆゝゝを
香席といひ根接をきつゝ二つといひ等香をい
香割小力一本二本と云程葉香割盤を一面
二面といふ根葉を二條二條と一葉二葉とも取二枚
とゆふ香炉へ火をきを礼火はとゆふ火味を
火間又ハ煎ともゆふ右宗信宗拾時代より
ほろひるゝ

一 根正のゆひのゆ

香をすめ、ゆゝ二條にてゆへゝ又ハゆゝ
方より香席は信のゆ肥満たる人ゆゝゆ
なとゝゆゝ人ハゆゝゆてゆゝゆゆゆゆ

一 香炉のゆゝゆ

香炉も人ハゆゝゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一 香炉のゆゝゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

利能のゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一 組合之事

行 此飾表儀之

乱筥乃飾



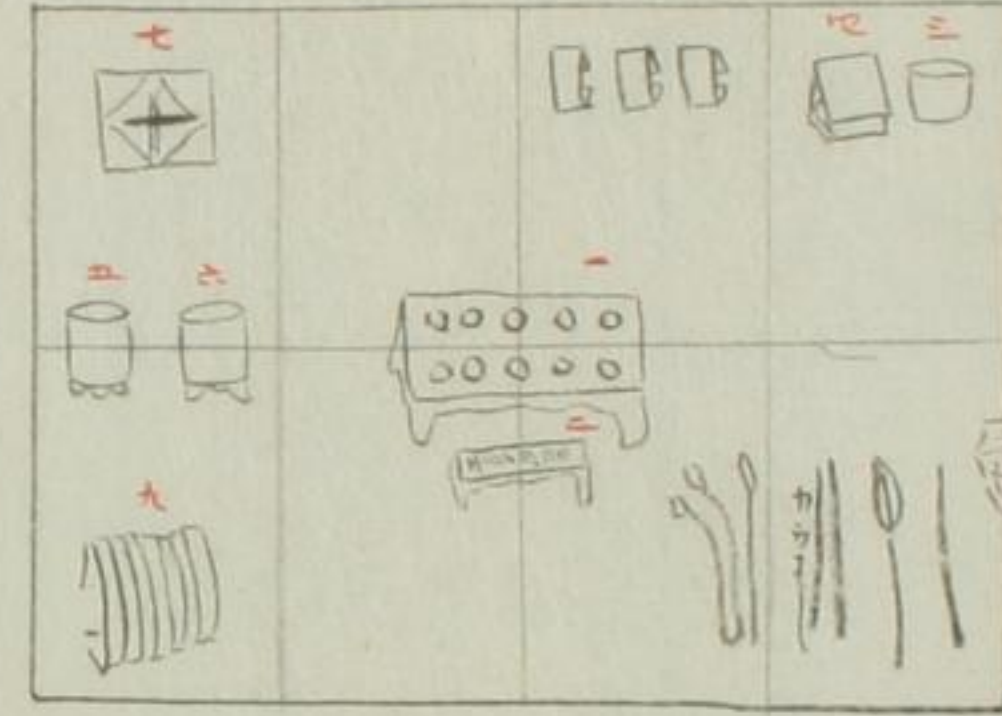
乱筥表儀之
敷紙入置

源内法り
是ハ小ノ
大ハ紙外ノ
故共知得子儀
三寸五分

一 道合之事

右行ノ儀表儀之

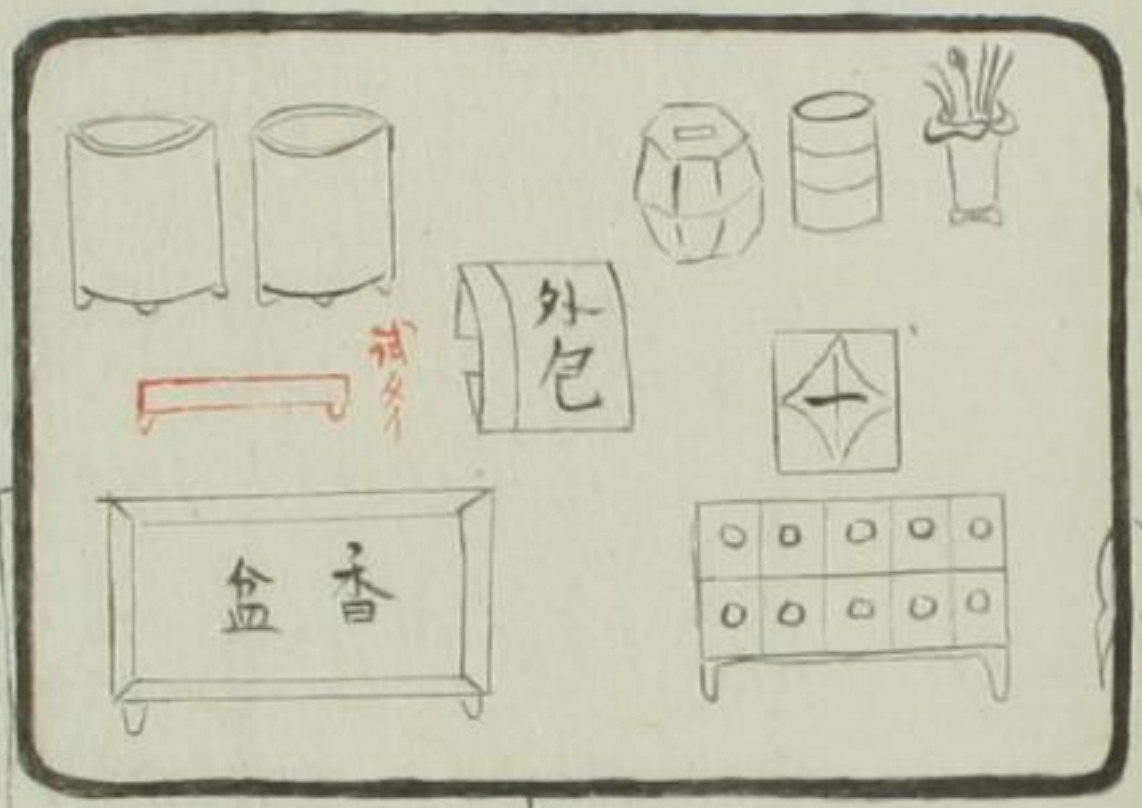
敷紙佈



此ハ儀表ノ礼儀
コトニ由リ礼儀
入置座
管ハ儀表ノ
右ノ五寸五分

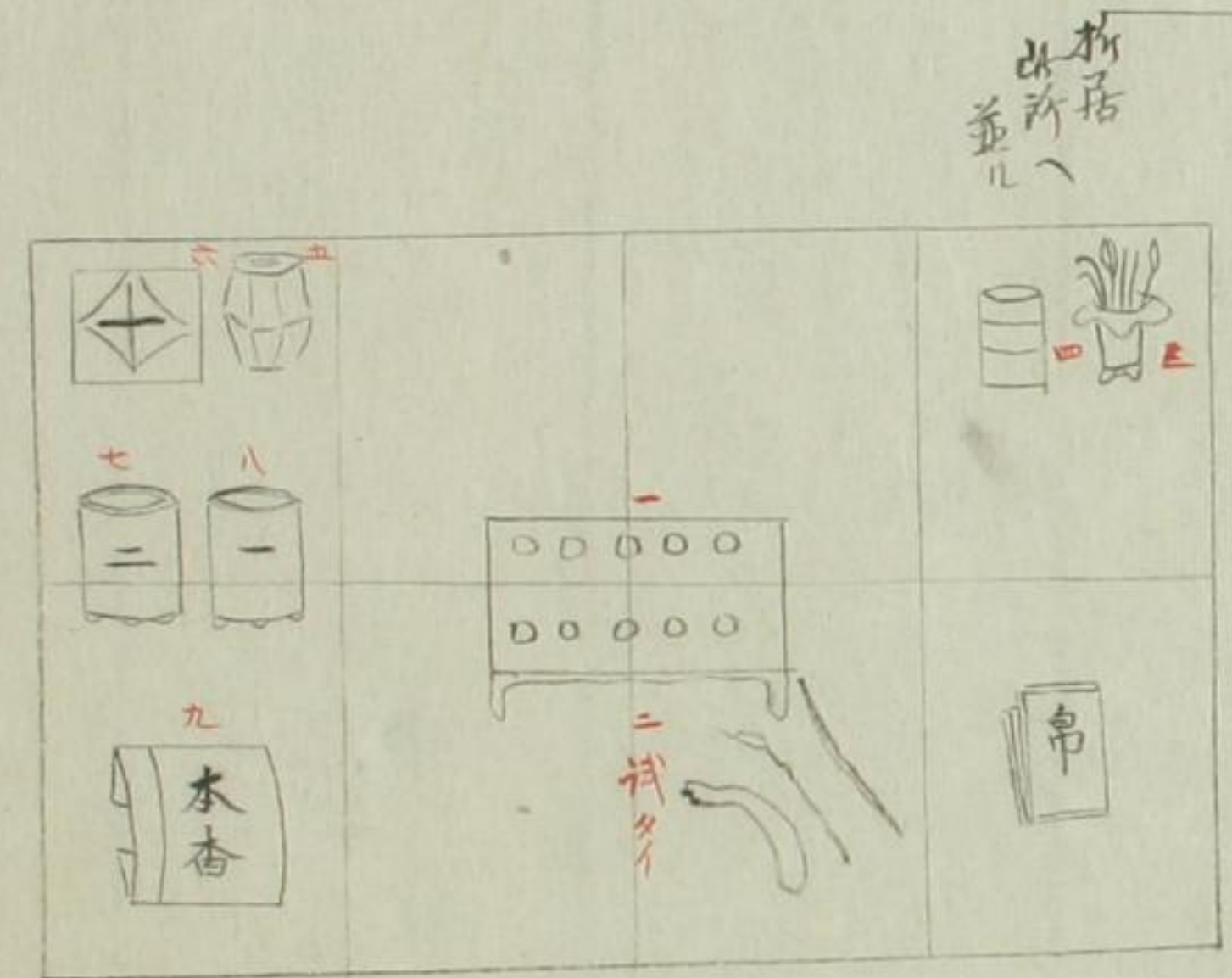
一 真之飾

乱筥真也



敷紙

辛規



裏裏飾

折居
並ハ

一 灰創製法

きこしと焼て粉こしてタウ一本の申の白
いと去りて焼二皮と尚多きを音場へ入火
をほくろくたの事と云ふ別白ことと云
けりて者て粉能きやの如く焼粉ゆて
中んにて用ててこれをもろくんに懸
り一本と灰ゆててのみますこれす法
通てやてきや一日一夜ある事
能く 能く勿得れよとて二十日の
内雨露を預る尚干乾し火能く使
き創製と用ゆ湯をせん 用事
と云ふ創製はこれなり

右の如く創製法は灰創製法と云ふ事
海吹の灰創製と云ふ事

一 灰創製法

灰創製法
葉灰を古葉ハ揚灰を二割ハ葉物ハ葉の事と
カニスト云物ノ法ハ揚灰と焼き細末ゆて用ぬ
凡そ此灰は又見取里何んかへ先あり又麻
を焼て灰ゆてて用ぬ事

右の如く創製法は灰創製法と云ふ事
海吹の灰創製と云ふ事

一 灰創製法

灰創製法
葉灰を古葉ハ揚灰を二割ハ葉物ハ葉の事と
カニスト云物ノ法ハ揚灰と焼き細末ゆて用ぬ
凡そ此灰は又見取里何んかへ先あり又麻
を焼て灰ゆてて用ぬ事

右の如く創製法は灰創製法と云ふ事
海吹の灰創製と云ふ事

灰創製法
葉灰を古葉ハ揚灰を二割ハ葉物ハ葉の事と
カニスト云物ノ法ハ揚灰と焼き細末ゆて用ぬ
凡そ此灰は又見取里何んかへ先あり又麻
を焼て灰ゆてて用ぬ事

右の如く創製法は灰創製法と云ふ事
海吹の灰創製と云ふ事

灰創製法
葉灰を古葉ハ揚灰を二割ハ葉物ハ葉の事と
カニスト云物ノ法ハ揚灰と焼き細末ゆて用ぬ
凡そ此灰は又見取里何んかへ先あり又麻
を焼て灰ゆてて用ぬ事

右の如く創製法は灰創製法と云ふ事
海吹の灰創製と云ふ事

灰創製法
葉灰を古葉ハ揚灰を二割ハ葉物ハ葉の事と
カニスト云物ノ法ハ揚灰と焼き細末ゆて用ぬ
凡そ此灰は又見取里何んかへ先あり又麻
を焼て灰ゆてて用ぬ事

香と下類

香と下類は香の類に属するものなり

上座の事

香席の上座は主人に居るべき事
の儀は主人の席に香えの向ひと上座として
右より心香えより香炉と例の通り出て
主人の席へ一平人の座すべし座り居て
上座より定香えの右と上座より定香え
とも香えの右は皆口杯の座交は上座
又あつる候香えの右と上座と定め
たす存す一香えもその時座へ袖へ香
と物也

組香類の事

組香ハ十組香といへんとて
三層組ハ有近代ノ香ハ能き香と出た
のハ此なり

組香合式抄の事

組香の式ハ真の香の三層を
花月香ハ此の用ひ候合香連御香ハ

真と用ひ主人招法の席ハ真と用ひて席ハ
席等も心とひ有べし

十組香の事

十組香ハ組香の根なりて
證するもの

- 十柱香 武十柱 花月香 定座の香
- 小鳥香 時鳥香 小鳥香
- 系圖香 系圖香 系圖香
- 燒合香 燒合香 燒合香

世間原年香ハ揚負の分と
又名原香と云ふ物也
世間原年香ハ揚負の分と
又名原香と云ふ物也

主人の席より香の事

宗何の書ハ主人より
知人杯ハ此の儀
結ぶ候香ハ此の儀
あハ此の儀
辨通とハ此の儀

同を去移示引合ホの儀と用一技と由ツ少れて
 ハツシ田へ一折形ハ四ツ折テ上と折テ
 小する之折形ハ有
 一 四角香寸法之事
 クノ本庄と用之て一折ハ五分長サ七分
 巾式也

一 細竹箱之事 但寸法
 香炉袋の細之袋の口ニ大細寸ハ香炉の
 大小より袋も大小あり是又寸法有て可
 長細ハ倍小ぬ之 諸事 柔入袋の細の寸
 法同也

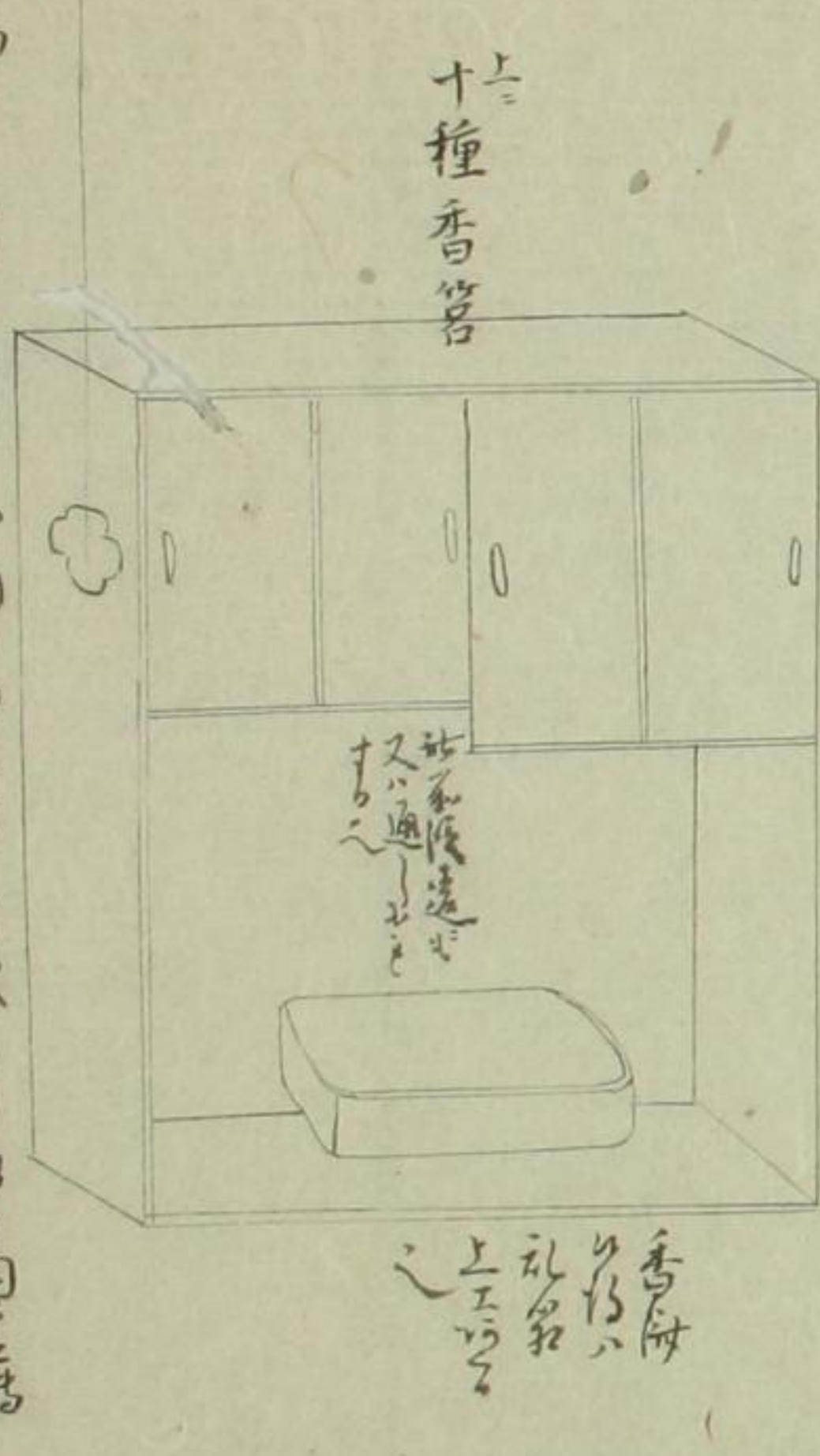
一 銀葉打交寸法之事
 銀葉ハ茶茶カキニテ 古代ハ香炉旁ニ今ハ
 浪葉茶カキノ故 古代の寸法ニテハ大ニ故カキ
 四方と用ル

一 香屏風寸法之事
 長ク或尺寸寸法也 但寸法ニテハ高ハ六尺
 寸 然ハハ世ぬ之蝶付ハ寸法ハ寸ノ折細之
 端と引通 横ハ寸ノ折細又ハ角
 総ハ二折ハ寸法也



一 火折袋寸法之事
 馬タスチハヤリノ類ニ
 一 火折袋寸法之事
 一 火折袋寸法之事
 一 火折袋寸法之事

一 火折袋寸法之事
 一 火折袋寸法之事
 一 火折袋寸法之事
 一 火折袋寸法之事



一 十種香篋
 一 十種香篋
 一 十種香篋
 一 十種香篋

又亦く、蘇林のこくくにて梅の本のここのくく
四世國の巧き白ひこたけり

一 造加之事

文字をねていひ造ひかふるといふ心をも
ばん名香六十符を宗信定之、後、小又
宗、圖一符と加て六十一符といふなり
なり、是造ひかふる後、又、宗、中と組
香、用ふる時、初の通り二二と色、並して
別傳書、五月、花の書、考、又、東大
るの後、河、香と香と焼くと造加、
い、又、竟、造加、と、香、初の香と忘、ま
ト、き、為、
き、
香、
香、
香、

一 香道之事

宗、河、の書、名香と人、ま、す、に、二、符、を
和、二、符、二、符、を、和、一、符、と、ま、す、と、
あ、後、後、い、
又、名、香、人、か、ま、に、能、名、香、杯、と、い、わ、れ、後、の、香、少、
は、
き、
い、
い、
書、

包紙と付式包紙、有、又、畧、して、ま、す、
の内、小、二、符、と、書、包、の、上、小、二、符、と、
を、す、
紙、を、た、
上、に、二、符、
す、

一 香所之事

此香所、
小、
家、
類、
と、
以、
極、
十、

一 依香之事

依香、
早、
香、
方、
足、
用、
ハ、

右條々雖為祕事 依教年深志
乞口傳者也 みる可也 他見有魚々
死するよし也

寛政十二年三月三日

保定
〇



香道誓詞文之事

- 一 志願流弊 依此香道漸以 以御守迄
夏迄 并 諸誓 没化見他之 石鋪事
 - 一 一切之香本不選 以古之原 附方 堂大小之候
令壇者 改定 火末 大切 以扱 以山事
 - 一 部之於人 第一 姓之香 以之守 進中事
占座 裁少 在之 前之 扱以 以石發事
 - 一 誓香之後 凡家之位 一人 凡 容易 扱
扱以 以石發事 依香 各扱 公及 傳使
跪之 為 神祭之 席 多 水口 軟始 之 款 處
席 之 玉 係 迄 之 友 友 扱 處 末 之 所 考 考
以石發事
- 右香道多年 依此守 今度 守 初下流 之 白 後
誓願 迄 誓 誓 併 極 奧 後 以 世 條 々
誓 亦 可 守 以 於 若 遠 守 之 之 蒙 神 明
罪 者 者 之 仍 扱 誓 詞 文 敬 白

年号 月 日

一 一 守 師

各宗判

右書寫現蓮華依少志守
以儀尸之師他乞他言可有
かゝる位よの也

時
文政六年七月

自造庵

宗惠齋



可善居

如
書
序

